

A-161 20才代と50才以上の夫婦世帯の食品購入状況について

香川栄養専 ○川村玲子

女子栄養大 香川 綾, 香川 芽子.

[目的] 我国の食生活の変化はかなり流動的である。各個人の年次的な変化も亦られるが、各年令層によつても断層があり、これらは全体的平均でははつきりつかめない。そのような年代別の断層傾向を明らかにするためには違つた年代の世帯について食品の選択や購入の傾向が一つの参考になる。栄養学計簿の記録から20才代と50才以上の夫婦世帯を選び、食品の選択傾向及び購入量について年代別の差を検討した。対象は栄養学計簿モニターで食生活には関心が強く、国民の平均に比し両年代共、食品はフランスより取られている。

[方法] 栄養学計簿モニターの中から20才代、平均年令27才)11世帯22ヶ月分、50才以上(平均年令56才)8世帯22ヶ月分を選び、食品群別に購入量の比較。菓子嗜好品 調理食品、調味料などについては購入価格で比較した。更に食品群中の各食品の選択傾向を購入量から比較した。

[結果] 食品群別にみると20才代では、50才以上に較べて購入量が多いのは、肉類、油脂類で約2倍、少ないのは芋類である。その他は余り大差はみられないが、各食品の購入状況は年代別に差があった。例えば菓類では50才以上に較べてサトウ、サンマ、生サケ、カツオカマスは約50%以下、シヤギ、エビは1.5倍、干物ではシロイモ、白オキが2倍以上である。緑黄色野菜ではいせり、ローマン、ブロッコリーが1.5~4倍、ほうれん草、小松菜、ヤケギは30~70%である。菓子嗜好品、飲料、調理食品の購入費用は20才代では1.4倍で、品目別にみるとケツパ類、ローケツ、洋酒、ビール、ケーキ、インスタントスープ、ハンバーガーなどに多くつかわれている。